

近代のビール瓶 ―盛岡市内出土・採集資料と市場流通資料の事例―

盛岡市遺跡の学び館 津嶋 知弘

〔キーワード：近代、明治、大正、昭和、ガラス瓶、ビール瓶、陽刻、ラベル、広告物〕

1. はじめに

大手ビール会社のキリンビールから令和3年(2021)に全国販売が開始されたブランドに「スプリングバレー」がある。この商品名は、明治3年(1870)にノルウェー出身のアメリカ人ウィリアム・コーブランドが横浜に開設したビール醸造所「スプリングバレー・ブルワリー」に由来するものであり、後年これを引き継いだのが現在のキリンビールの前身、「ジャパンプルワリー・カンパニー」である。一方、日本人によるビール醸造所は明治5年(1872)に豪商の渋谷（しぶたに）庄三郎が大阪に開設、「渋谷ビール」として売り出した。その後、甲府で「三ツ鱗」印ビール、東京でも「桜田ビール」「浅田ビール」が発売されたが、いずれもコーブランドのもとで働いた人物が醸造に携わったと言われている（キリンビール株式会社 2017）。このように、国産ビールは明治初期の誕生から約150年の歴史を持つが、その普及に重要な役割を持っていたのが、容器としてのガラス瓶であった。

筆者はこれまで、遺跡発掘調査報告書で近現代ガラス瓶を掲載・報告してきた（盛岡市・盛岡市教育委員会 2020・2021a・2021b）。また、岩手県内における近現代ガラス瓶の発掘調査報告書への掲載状況と盛岡市教育委員会での取り組み、及びその課題について紹介している（津嶋 2023）。これらをふまえて、本稿では、明治・大正から昭和前期（戦時下）までの近代ビール瓶に着目し、盛岡市内遺跡出土資料、盛岡市内採集資料、及び筆者がオークションサイトやフリーマーケットサイト等で入手したビール瓶（市場流通資料）について事例を紹介し、近代考古学研究の一助としたい。

2. 国産ビールの近代史と近代ビール瓶の研究

(1) 国産ビールの近代史

近現代の国産ビール醸造の歴史を体系的・網羅的に記述した好著としては、平成8年(1996)刊行のサッポロビール株式会社広報部社史編纂室編『サッポロビール120年史』がある。また、令和3年(2021)刊行の佐野宏明編『開花図案 文明開化に始まる商業デザイン』（光村推古書院）は、近代日本の詳細なビール史とともに、ラベルや広告などのデザインが豊富なカラー図版で掲載されている。詳細はこれら書籍を参照いただきたいが、国産ビールの近代史の概要は以下のとおりである。

明治時代初期の日本におけるビール醸造の始まりについては、前章で紹介したとおりであるが、幕末開国の安政5年(1858)には早くもイギリスやドイツから瓶詰めビールの輸入が始まり、明治時代前半はヨーロッパやアメリカからの舶来ビールが全盛だった。国内のビール生産量が輸入量を超えるのは明治19年(1886)だが、輸入量のピークは明治20・21年(1887・88)であり、以降徐々に減少していく。

この時期、現在につながる大手資本のビール会社が登場する。明治 18 年(1885)にジャパンプルワリー・カンパニー (明治 21 年(1888)「キリンビール」発売)、明治 20 年(1887)に日本麦酒醸造 (東京三田、明治 23 年(1890)「エビスビール」発売)、明治 21 年(1888)に札幌麦酒 (北海道札幌、「サッポロビール」)、明治 22 年に大阪麦酒 (大阪府吹田、明治 25 年(1892)「アサヒビール」発売) が設立された。その後、明治 31 年(1898)に東京麦酒 (神奈川県保土ヶ谷、明治 40 年(1907)に大日本麦酒が買収) の「東京ビール」、明治 32 年(1899)に丸三麦酒 (愛知県半田、明治 39 年(1906)に日本第一麦酒、明治 41 年(1908)に加富登麦酒) の「カブトビール」が発売された。

家庭でビールを飲むことが一般化したのは明治 36 年(1903)頃。明治 39 年(1906)に札幌麦酒・日本麦酒・大阪麦酒が合併して大日本麦酒が設立され、サッポロ、エビス、アサヒの 3 銘柄のほか、新たにピース、ミュンヘン、ビタミンなどの銘柄が発売された。外国人資本であったジャパンプルワリー・カンパニーは、明治 40 年(1907)に日本人資本の麒麟麦酒となった。大正 2 年(1913)に帝国麦酒 (福岡県門司、昭和 4 年(1929)より桜麦酒) の「サクラビール」、大正 9 年(1920)に日英醸造 (神奈川県横浜、昭和 3 年(1928)より寿屋) の「カスケードビール」、同年に東洋醸造 (宮城県仙台、大正 12 年(1923)に麒麟麦酒が買収) の「フジビール」が発売された。加富登麦酒は帝国鉱泉 (清涼飲料水「三ツ矢サイダー」製造販売)・日本製塩と合併して日本麦酒鉱泉となり、大正 11 年(1922)に「ユニオンビール」が発売された。

昭和に入ると、麒麟麦酒以外はすべて大日本麦酒に吸収合併され、戦時下の昭和 15 年(1940)にビールの配給制が始まり、昭和 18 年(1943)には各社の銘柄が廃止されて統制下の統一ラベルとなった。

縦24.5×横16.5cm



雑誌広告：大日本麦酒株式会社「アサヒ サッポロ エビス ビール」【大正11年(1922)】(筆者蔵)

（2）近代ビール瓶の研究

工業製品であるガラス瓶を文化史的に位置づけた山本孝造氏の『びんの話』（1990、日本能率協会）では、一章を使いビール瓶の歴史が詳細に紹介されており、基礎的文献といえる。また、2000年代初頭から始まった昭和レトロブームの広がりから、博物館や美術館で古いガラス瓶の展示会が開催されるようになっており、その図録に近代ビール瓶がカラー図版で掲載されている（石川県能登島ガラス美術館2009、杉並区立郷土博物館2009）。これらには、びん研究家 庄司太一氏による「壺の小さな博物館 ボトルシニアター」のコレクションが紹介されており、近代ビール瓶の種類や製造年代を知る手懸りとできる。

一方、1980年代以降の近現代遺跡の発掘調査増加を背景に、ガラス瓶を考古学資料として研究し、物質資料から近現代の歴史像を復元する試みとして、桜井準也氏の『ガラス瓶の考古学』（2006初版、2019増補版、六一書房）があり、他のガラス瓶と同様にビール瓶の実測図が集成・解説されている。刊行後、本書を参考としてガラス瓶の報告が全国で行われており、ガラス瓶が遺跡の評価を可能にする資料となりうるという認識が広がりつつある。

さらに、梶木理央氏は考古学資料の大日本麦酒ビール瓶から近代ガラス瓶の製造技術の発展過程を具体的に検討する研究を行っており、ビール瓶の製造年代がより詳細に考察されている（梶木理央2020「近代ガラス製造業における製瓶技術の発展過程 考古学資料の検討から」『GLASS 日本ガラス工芸学会誌』64）。以下、梶木氏の研究成果を紹介する。

梶木氏は、3社合併による大日本麦酒設立後の製瓶方法の進展を5箇所の製瓶工場（札幌、吹田、保土ヶ谷、尼崎、博多）ごとにまとめ、社史の記述に基づいて、3段階（人工成形、半人工成形、自動製瓶機）の製造技術の変遷を示している（第1図）。また、『大日本麦酒株式会社概覧』掲載画と広告ポスターの検討から、ビール瓶の基本形態が、なで肩コルク栓から、いかり肩王冠栓への変化が想定され、いかり肩段階に陽刻（エンボス）の配置が、胴下部から肩部に変化すると判断。これと、出土資料の製造時の痕跡からビール瓶の変遷を整理している（第2図）。

胴部から口縁部にみられるとする成形痕の特徴は、次の3段階としている（第3図）。

第1段階：全体に水平方向の回転痕が目立つもの。

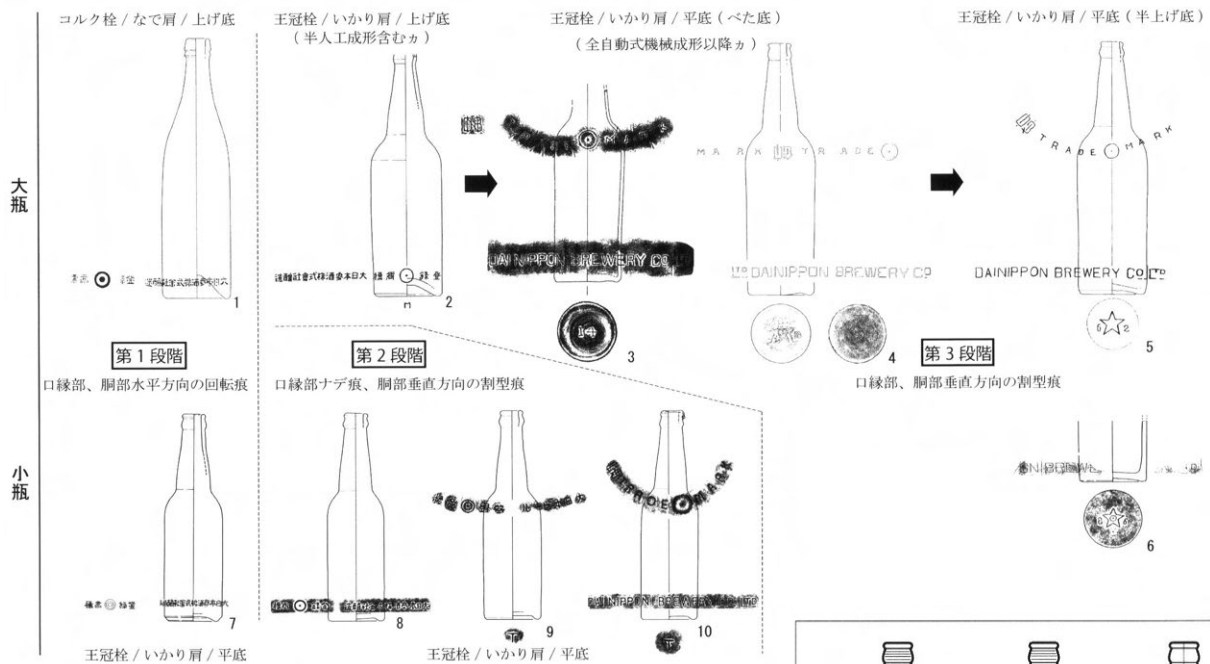
第2段階：口縁部周囲がややくびれて横方向の回転痕が確認され、口縁直下から胴部にかけて垂直方向に2条の割型痕が確認されるもの。

第3段階：胴部から口縁部直上まで第2段階と類似する2条の割型痕が確認され、口縁部直下に段差が見られるもの。底部には円状の成形痕（破線）が現れる場合があり、この円状痕から胴部に向かって垂直方向にかすれた状態の割型痕が見られることもある。

そして、製造技術の変遷と成形痕の特徴との対応については、第1段階が人工成形「廻吹法」、第2段階が人工成形「吹込法」、第3段階が半人工成形（半自動式機械成形）ないし全自動式機械成形としている。このうち、割型痕はあるが底部に円状痕のない資料は半人工成形（半自動式機械成形）、底部に円状痕と数字の陽刻（エンボス）があるものは全自動式機械成形（オーエンス機）、と推測している。

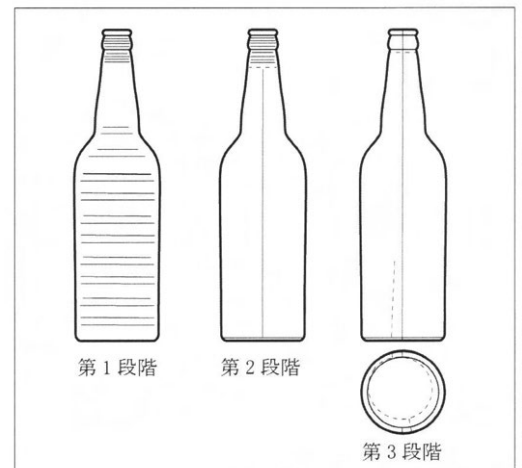
製造の段階	年号	札幌工場 (旧札幌麦酒)	吹田工場 (旧大阪麦酒)	保土ヶ谷工場	尼崎工場	博多工場	その他
人工成形 半人工成形? 自動製瓶機	明治39年		補助機を用いてびん口を整え、王冠コルクのアサヒビールを出荷したと記録がある(3月) ※1				
	40年	第2製瓶所を新築。シーメンス式溶解炉を築造 第1・2製瓶所シーメンス式リジェネラティブ不連続タンク窯を設置					
	44年		兵庫尼崎市大物機械製場合名会社を買収。→同社の製瓶機を吹田工場へ デッセル式製びん機改良。 →吹田式半自動製びん機 手吹き式の製瓶は廃止				
	大正2年						
	3年						
	5年		不連続式タンク窯→シーメンス式リジェネラティブ不連続タンク窯に改良	工場設立 日本硝子工業㈱を設立 オーエンス式自動製瓶機の特許権を獲得、操業開始 (A.Q か※2)			
	6年	連続タンク窯に更新→昼夜連続作業を行なう					
	7年				工場設立 日本硝子工業㈱関西地区向けの製瓶拠点 オーエンス式自動製瓶機導入 (A.Q か※2)		
	8年	吹田式半自動製びん機を導入→手吹き式の製瓶は廃止					
	9年			日本硝子工業㈱吸収合併→7月末完了 大日本麦酒保土ヶ谷製瓶工場に 大日本麦酒尼崎製瓶工場に			
	10年						
	11年		グラハム式製瓶機導入 (A.W か※1) (時期不明だがのちにA.Y 導入※3)		工場設立 グラハム式製瓶機導入 (A.W か※1)		
	昭和2年	グラハム式製瓶機導入 (A.W か※1) (吹田工場のA.W 2基※3)					
	13年						リンチ式製瓶機導入(工場不明)

第1図 大日本麦酒製瓶工場における製造状況の変遷(梶木2020)



第2図 製造方法からみた大日本麦酒ビール瓶の変遷(梶木2020)

第3図 ガラス瓶の成形痕(梶木2020)



3. 盛岡市内遺跡出土の近代ビール瓶の事例

（1）細谷地遺跡

細谷地遺跡の概要 細谷地（ほそやち）遺跡は、盛岡市の南西部、JR 東北本線仙北町駅の南西約 1.5km に位置する。低位沖積段丘上に立地し、遺跡の東側は雫石川（北上川支流）の旧河道に面している。遺跡範囲は東西約 600m、南北約 280mをはかる（第 4 図）。大規模土地区画整理事業である、盛岡南新都市開発整備事業（都市再生機構施工）と道明地区土地区画整理事業（盛岡市施工）に伴い遺跡全体の発掘調査が行われ、8 世紀前葉から 10 世紀の大規模な古代集落が確認されている（発掘調査報告書一覧は盛岡市・盛岡市教育委員会 2021b 例言を参照）。

近現代廃棄土坑とガラス瓶 この細谷地遺跡の南端部、第 37・38・40・41 次調査（平成 29～令和 2 年度）において計 35 基の近現代廃棄土坑（RD901～935）が確認され（第 5 図）、陶磁器・ガラス瓶等が多量に出土している（盛岡市・盛岡市教育委員会 2020・2021a・2021b）。台帳登録されたガラス瓶の個体数（概ね完形または完形まで復元でき分類が可能なもの）は、第 37・38・40 次調査出土が 462 点（明治・大正～昭和 50 年代）、第 41 次 RD935 出土が 143 点（明治・大正～昭和 20 年代）、総計 605 点となっている。

出土したガラス瓶の種類（用途・細別）は以下のとおり。

〔酒瓶〕ビール瓶（米国製含む）、ワイン瓶、日本酒瓶、ウィスキー瓶

〔清涼飲料瓶〕サイダー瓶、ラムネ瓶、ジュース瓶、乳性飲料瓶、みかん水瓶、ニッキ水瓶

〔乳製品瓶〕牛乳瓶、ヨーグルト瓶

〔調味料瓶〕ソース瓶、カレー粉瓶、コンショウ瓶、ケチャップ瓶、マヨネーズ瓶、うま味調味料瓶

〔食品瓶〕佃煮瓶、ふりかけ瓶、食用油瓶、金平糖瓶、その他食品瓶

〔薬瓶〕薬品瓶、殺虫剤瓶（米国製含む）、医療用薬瓶、一般用薬瓶、目薬瓶、栄養保健剤瓶、軟膏瓶、その他薬瓶

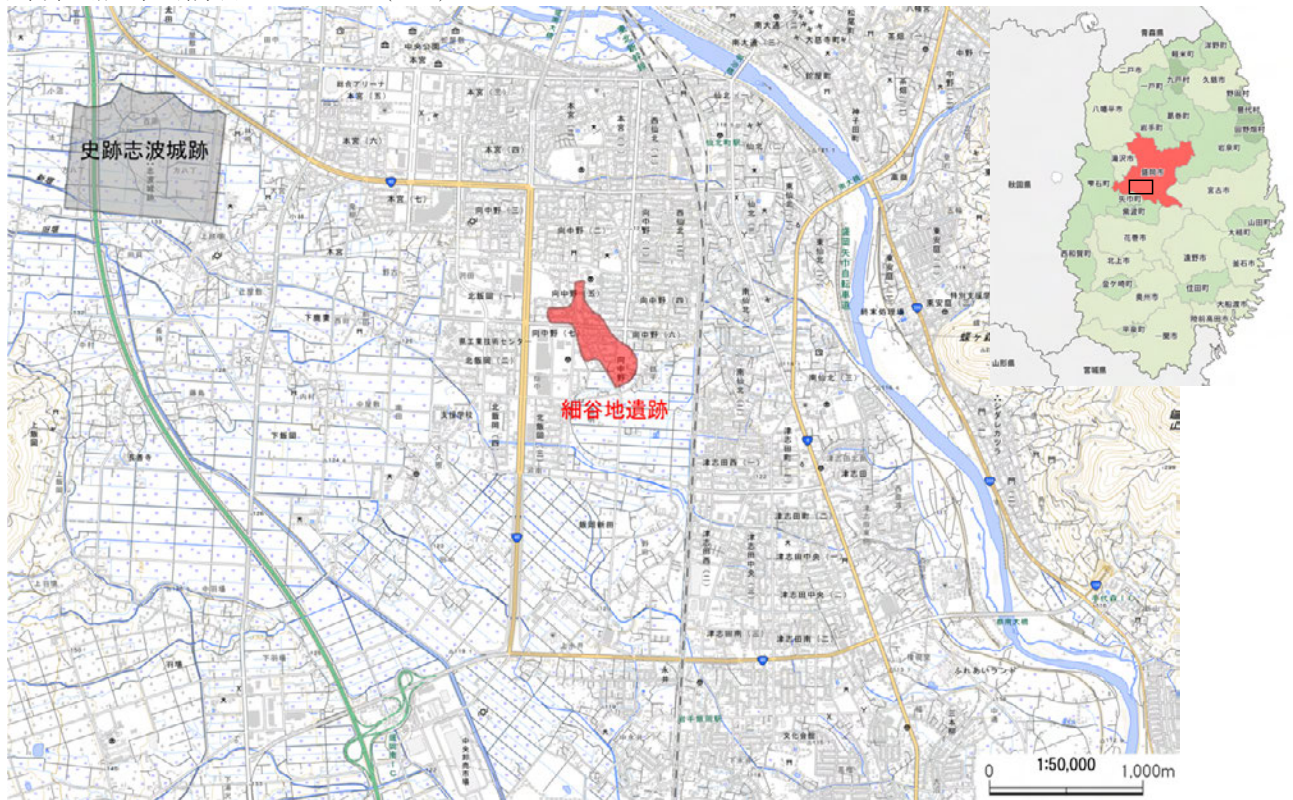
〔化粧瓶〕化粧水瓶、椿油瓶、整髪料瓶、化粧クリーム瓶、ポマード瓶、白粉瓶、香水瓶、歯磨粉瓶、その他化粧瓶

〔文具瓶〕インク瓶、糊瓶

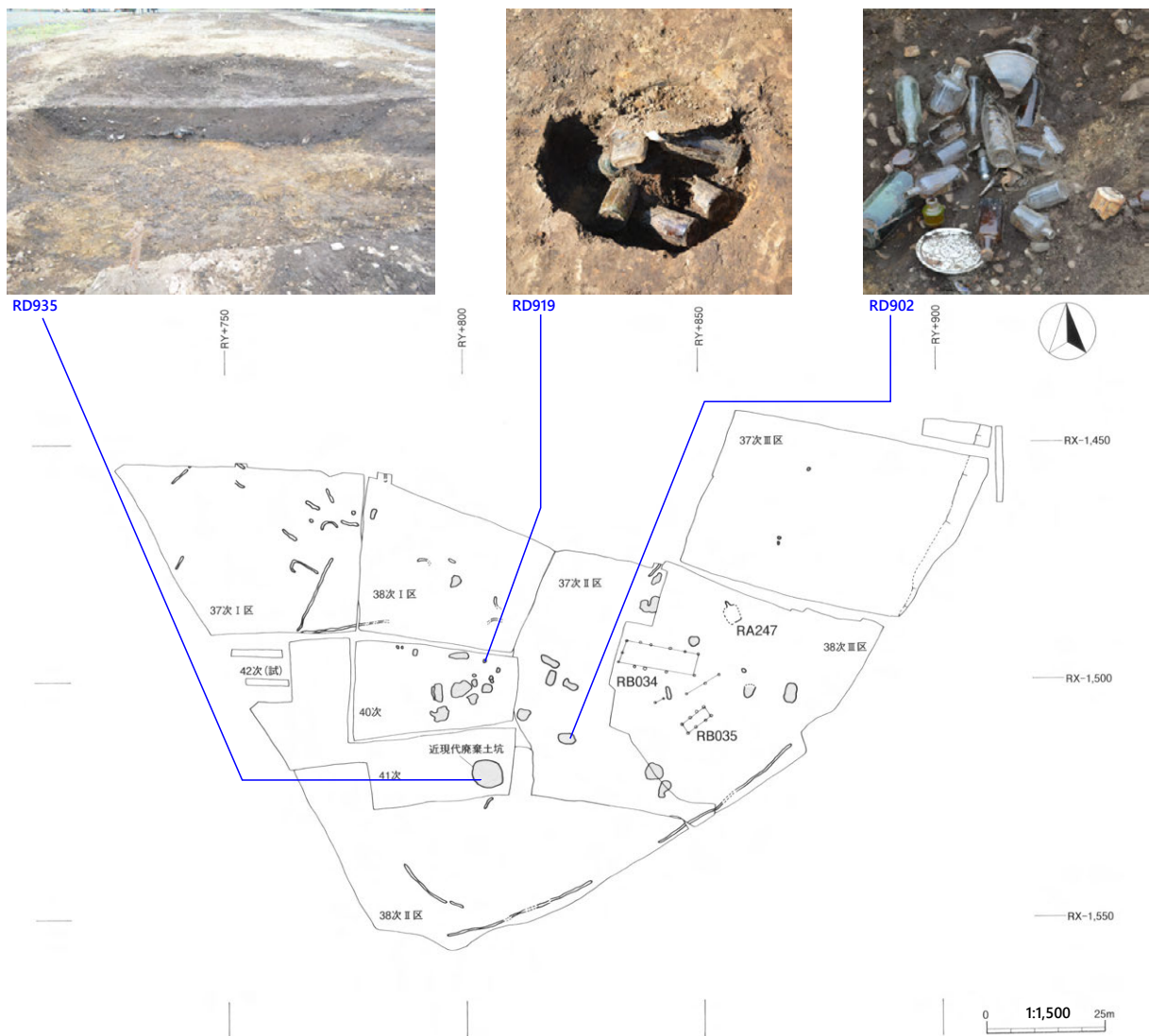
〔日常生活瓶〕靴墨瓶、白髪染瓶、染料瓶、食紅瓶、オイル瓶

出土ガラス瓶の組成を見ると（第 6 図）、第 37・38・40 次調査出土ガラス瓶は、化粧品瓶と薬瓶が 6 割程度を占める一方、その他の酒瓶・清涼飲料瓶・乳製品瓶・調味料瓶・食品瓶は比較的少ない。第 41 次 RD935 出土ガラス瓶は、薬瓶と化粧瓶で 5 割強を占める一方、酒瓶・清涼飲料瓶・乳製品瓶・調味料瓶・食品瓶という飲食系の瓶と、文具瓶・日常生活瓶の比率が拮抗している。第 37・38・40 次調査出土ガラス瓶のグラフと比較すると、第 41 次 RD935 出土ガラス瓶は飲食系の比率が低く、文具瓶・日常生活瓶の比率が高い。全体としては、都市近郊農村部である東京都日野市南広間地遺跡の大正期から戦後のガラス瓶組成（桜井 2019 p111 図 55）との類似が指摘できる。

ビール瓶 発掘調査報告書には、太平洋戦争終戦以前の近代ビール瓶が 7 点掲載されている（第 1～3 図版）。なお、昭和 20 年(1945)の終戦直後に日本へ進駐したアメリカ軍が持ち込んだビールのワンウェイ瓶は、基本的に日本国内では転用瓶として使用されたものと考えられることから（桜井 2019 p138 図 64）、本報告の対象から除外した。



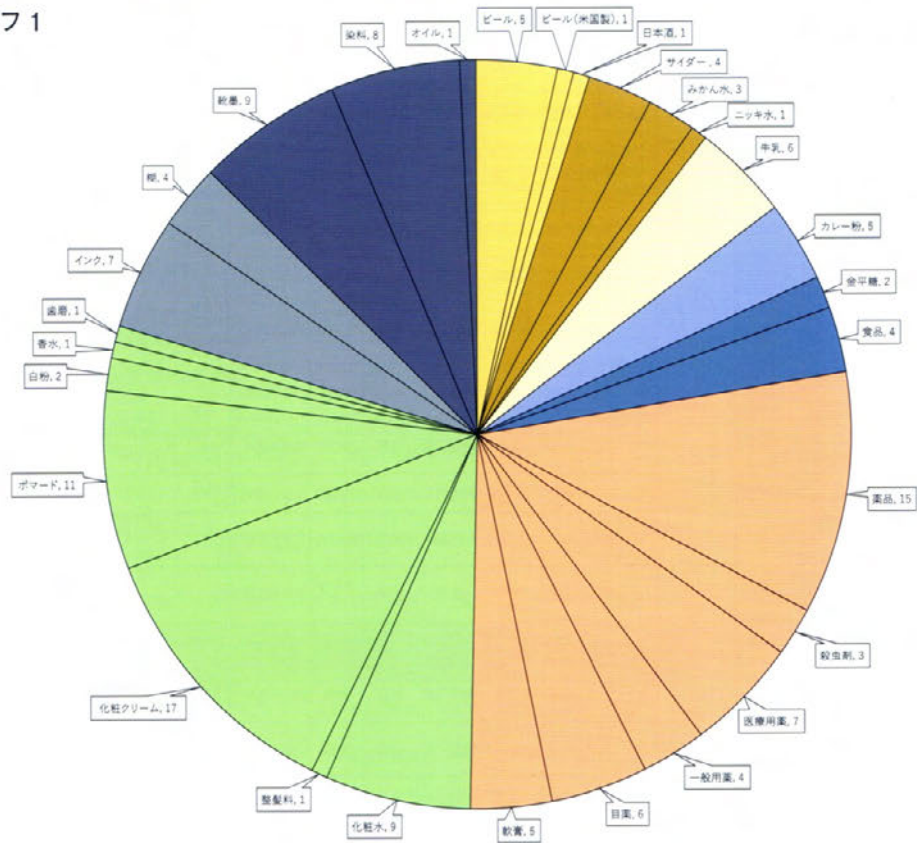
第4図 細谷地遺跡位置図



第5図 細谷地遺跡南端部(第37・38・40・41次調査区)

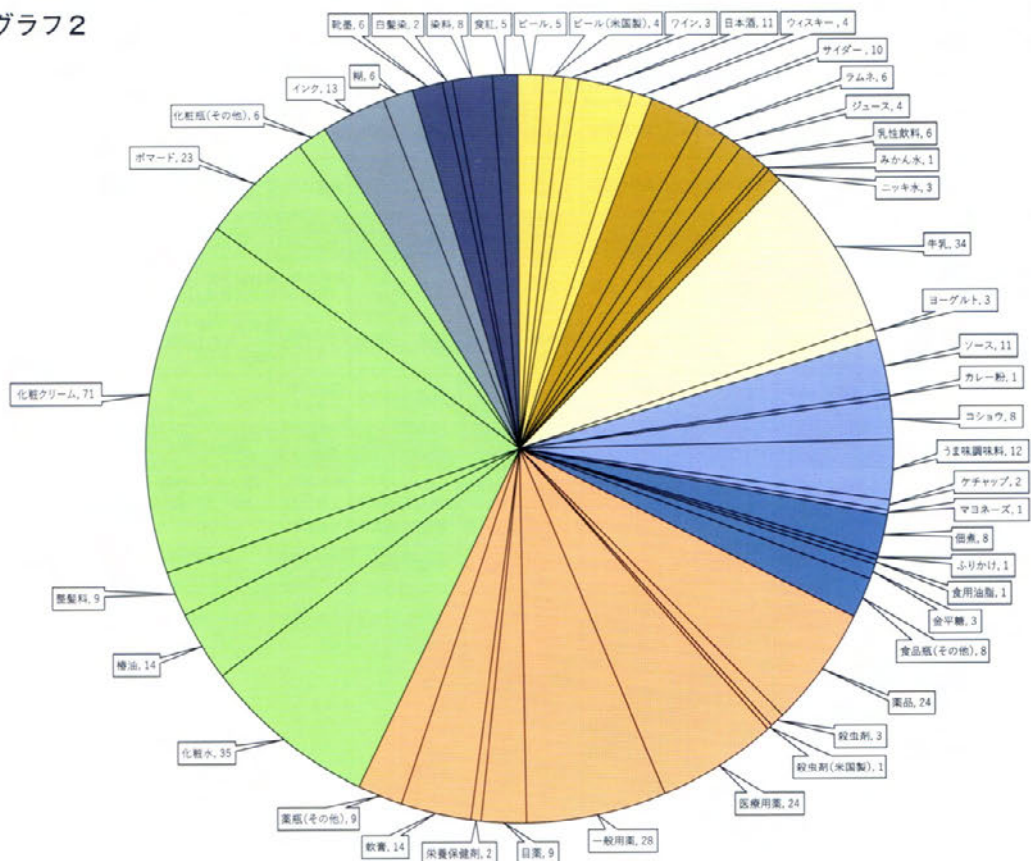
細谷地遺跡第41次調査RD935出土近現代ガラス瓶（143点）【明治・大正～昭和20年代】

グラフ 1



細谷地遺跡第37・38・40次調査出土近現代ガラス瓶（462点）【明治・大正～昭和50年代】

グラフ 2



第 6 図 細谷地遺跡出土近現代ガラス瓶組成グラフ

第1・2図版1～3は、RD902、919、935 廃棄土坑からそれぞれ出土した大日本麦酒のビール瓶。いかり肩で、3は口縁部が欠損しているが、いずれも王冠栓、全自動式機械成形で、瓶色は褐色半透明。肩部に陽刻「<DNB マーク>TRADE ○MARK」、胴下部に陽刻「DAINIPPON BREWERY CO LTD」。底部は平底で、陽刻「6<星形マーク>3」「16<星形マーク>2 N」「11<星形マーク>14」とある。前述の梶木 2020 論文の「第3段階」に相当し、製瓶年代は、広く見れば日本硝子工業(株)がオーエンス式自動製瓶機操業開始後の大正5年(1916)～昭和10年代であろうが、石川県能登島ガラス美術館 2009、杉並区立郷土博物館 2009 の図録では同様の瓶が「昭和初期～10年代」とされている。

第2図版4は、RD935 廃棄土坑より出土した麒麟麦酒のビール瓶。なで肩、全自動式機械成形で、瓶色は褐色半透明。肩部と胴下部に陽刻「登録<KB マーク>商標 (右読み)」「キリンビール (右読み)」、底部は平底。1～3と同様、製作年代は広く見れば大正5年(1916)～昭和10年代であろうが、杉並区立郷土博物館 2009 の図録では同様の瓶が「昭和10年代」とされている。

第3図版5は、RD935 廃棄土坑より出土した「サクラビール (桜麦酒(株))」瓶の胴下部～底部。全自動式機械成形と考えられ、瓶色は褐色半透明。胴下部に陽刻「サクラビール(右読み)」「SAKURA BEER」。底部は平底で、陽刻「K6」とある。後述のように、「サクラビール」ブランドの帝国麦酒(株)が、桜麦酒(株)に社名変更してからの製瓶とすれば、年代は昭和4年(1929)以降、大日本麦酒(株)と合併した昭和18年以前の昭和10年代と考えられる。

第3図版6は、RD935 廃棄土坑より出土した「ユニオンビール (日本麦酒鋤泉(株))」瓶の胴下部～底部。同社には前身会社からの「カブトビール」ブランドもあった。瓶色は褐色半透明。全自動式機械成形と考えられ、瓶色は褐色半透明。胴下部に陽刻「NIPPON BEER KO (欠損)」とあり、底部は平底。製瓶年代は、広く見れば会社が存続した大正11～昭和7年(1922～32)であるが、後述するように、その初期～前半期(大正11～15年頃)の瓶である可能性が考えられる。

第3図版7は、RD935 廃棄土坑より出土した、なで肩の瓶で、口縁部が欠損している。接合はしないが同一個体と考えられるコルク栓の口縁部破片が出土している。瓶色は褐色だが透明度は低い。全体に水平方向の回転痕があり、人工(にんく)成形(人工吹き、廻吹法)と考えられる。底部は上げ底(キック)で、陽刻「<YG マーク>」がある。ビール会社の陽刻等はないものの、後述するように同型の瓶に「エビスビール (大日本麦酒(株))」のラベルが貼られていることから(第7図版11)、ビール瓶として使用されたと考えられる。製瓶年代は、国産ビールの普及が進んだ明治30年代以降、王冠栓が普及し始める大正初期以前と考えられる。

4. 盛岡市内採集及び市場流通の近代ビール瓶の事例

盛岡市遺跡の学び館所蔵の市内採集資料と、筆者が所蔵する市場流通品について、おおよそ年代順に紹介・解説する(第4～14図版)。

第4図版8は、市場流通品の舶来ビール瓶で、口金とラベルが残存している。コルク栓、なで肩、上げ底(キック)で、全体に水平方向の回転痕があることから人工成形(廻吹法)。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。後述する国産の人工成形瓶より透明度がやや高い。瓶本体に陽刻はないが、口金に陽刻「M.RASPE & Co」「ストックビール(右読み)」、ラベルに「STOCK BEER」「FRENSBURG BREWERY」とある。肩ラベルは貼られていない。明治時代前半に全盛であった舶来ビールは、横浜と神戸の外国商

館を通じ多くの種類のビールが様々な国から輸入されていた。その双璧は、英国バス社の「ペールエール」と、ドイツの「ストックビール（STOCK BEER）」（本資料）であった（佐野宏明編 2021,p82）。明治初頭は英国ビールの人気が高かったが、明治 18 年(1885)から数年間、ドイツ領事館が自国産ビールの売り込みを熱心に行うと、淡白で苦みが少なく飲みやすいドイツビールが日本人の好みに合ったこともあり、次第に主流となっていった（キリンビール株式会社編 1984『ビールと日本人』三省堂,p95-102）。明治 20 年(1887)頃は、フレンスブルク醸造所（FRENSBURG BREWERY）のストックビールが最も人気があり、シェアも高かった。ちなみに、フレンスブルクはドイツの北端、デンマークとの国境に位置する貿易都市である。当時、横浜居留地のエム・ラスペ商会（M.RASPE & Co）が日本の総代理人となって輸入し、横浜の洋酒商尾張屋豊吉（尾豊）が取次人となって国内の洋酒店へ売捌いていた。しかし、明治 21 年(1888)以降に国産のドイツ風ビールが次々発売されると、価格差もあって舶来ビールは競争に敗れ、「東京市中の需要は大抵和製品となりて輸入物は大半各地方へ積み送る事となりたり」（明治 25 年(1892)4 月 15 日付け『時事新報』）と輸入ビールの減少が報じられるまでになっていた。以上より、本資料の年代は明治 10～20 年代頃で、瓶そのものも海外（欧州）製と考えられる。

第 5 図版 9 は、市場流通品の国産ビール瓶で、肩ラベルの一部と胴部・胴下部のラベルが残存している。コルク栓、なで肩、上げ底（キック）、全体に水平方向の回転痕があることから人工成形（廻吹法）。瓶色は褐色半透明で気泡がみられる。瓶本体に陽刻はない。ラベルよりジャパンプルワリー・カンパニー（Japan Brewery Company、以下 JBC）の「キリンビール」のビール瓶である。JBC は、横浜のスプリングバレー醸造所の跡地に明治 18 年(1885)に設立され、明治 21 年(1888)より「キリンビール」の醸造を開始。外国人居留地内の施設であったことから日本人が保有することが許されず、外国人資本（香港系）の会社であった。醸造技師としてドイツ人ヘルマン・ヘッケルトが招聘され、最新の製氷機器も整備された（佐野宏明編 2021,p88）。幕末に締結された諸外国との不平等条約により、外国法人である JBC が内地でビールを販売するためには、日本人の経営する代理店を利用しなければならず、磯野計が経営する商社の明治屋が総代理店に指名された（生島 2004,p125）。本資料のわずかに残存する肩ラベルにも「MEID（欠損、MEIDI-YA）」「YOKO（欠損、YOKOHAMA）」の文字が残っている。「キリンビール」の銘柄は、株主であった三菱の荘田平五郎の発案であるが、発売 1 年後の明治 22 年(1889)に現在に続く「天翔ける麒麟」のラベル図案へ変更したのは明治屋の磯野計であった。キリンビールは、明治 23 年(1890)の第三回内国勸業博覧会で有功賞、明治 28 年(1895)の第四回内国勸業博覧会で有功一等賞を受賞しているが、それをうたったラベルが本資料の胴下部に貼られており、明治 29 年(1896)の新聞記事にも掲載されている。なお、内国勸業博覧会は、明治時代の日本で開催された博覧会で、国内の産業発展を促進し、魅力ある輸出品目育成を目的として、東京（上野）で 3 回、京都・大阪で各 1 回の計 5 回、政府主導で開催されたものである。また、ビール各社では明治 20 年代後半にはビール瓶の国内製造が軌道に乗ったとされており（梶木 2020,p4）、本資料も国産ビール瓶で問題ないと考えられる。本資料の年代は、第四回内国勸業博覧会開催の明治 28 年(1895)以降、ジャパンプルワリー・カンパニーが解散する明治 39 年(1906)以前と考えられる。

第 6 図版 10 は、市場流通品の国産ビール瓶で、王冠と、状態は悪いが口の封緘ラベルの一部と肩ラベル、胴ラベルの一部、裏面ラベルが残存している。王冠栓、なで肩、上げ底（キック）、全体に水平方向の回転痕があることから人工成形（廻吹法）。瓶色は褐色半透明で気泡が混じる。瓶本体に陽刻はない。ラベルより、東京麦酒新株式会社の「東京ビール」のビール瓶である。明治 10～20 年代に東京を代表す

るイギリス風ビールであった桜田麦酒会社の「桜田ビール」は、コーブランドの弟子の久保初太郎を技師として迎えて始まったものだったが、明治29年(1896)に会社が改組され、東京麦酒株式会社となった。明治30年(1897)には工場を神奈川県保土ヶ谷に移転してドイツ製醸造設備を揃え、明治31年(1898)にドイツ風下面発酵ビールである「東京ビール」の発売を開始した(サッポロビール株式会社 1996,p191)。ラベルには雄鶏が採用された。この東京ビールは、明治33年(1900)に王冠栓を国内で初めて採用したことで知られている。しかし、会社の経営がうまくいかず、明治39年(1907)に東京麦酒新株式会社と社名を改めたものの、1940年(1908)2月に大日本麦酒に吸収合併されている。本資料は、肩ラベルに「東京麦酒新株式会社(右読み)」とあり、年代を明治39年(1907)に限定できる。胴ラベルは多くが欠損し、雄鶏の図柄も判然としないが、大日本麦酒との合併直後のラベルにほぼ引き継がれているようである(サッポロビール株式会社 1996,p225)。裏面ラベルも状態が悪く、多くの文字が判読できないため内容が不明であるが、ドイツ(独国)と同様にビール大国である「奥国」(オーストリア)の文字がみられる。

第7図版11は、市場流通品の国産ビール瓶で、状態は悪いがラベルが残存している。コルク栓、なで肩、上げ底(キック)、全体に水平方向の回転痕があることから人工成形(廻吹法)。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。瓶側面に陽刻はないが、底部に第3図版7と同様の陽刻「<YGマーク>」がみられる。ラベルより、大日本麦酒株式会社の「エビスビール」のビール瓶である。「エビス」の銘柄は、明治20年(1887)に設立された日本麦酒醸造会社が、ドイツ製醸造装置を備えた大規模工場明治22年(1889)よりビール醸造を開始し、明治23年(1890)2月より「恵比寿ビール」を発売したことに始まる(佐野宏明編 2021,p92)。しかし、発売翌年に経営不振に陥り、株主の三井物産より再建のため派遣されたのが、馬越恭平であった。馬越は一気に業績を回復させ、明治26年(1893)に日本麦酒株式会社と改称。明治33年(1900)のパリ万国博覧会では、エビスはアサヒ、カブトとともに金牌賞を受賞した。

縦25.0×横37.2cm



引札:「恵比寿黒ビール(日本麦酒株式会社)」【明治28~39年(1895-1906)】(筆者蔵)

縦14.0×横9.0cm

馬越は、当時のビール業界の競争緩和のため合同化する戦略に動き、農商務大臣が合同を斡旋して、有力3社（日本麦酒、札幌麦酒、大阪麦酒）が合併、明治39年(1906)に大日本麦酒株式会社が誕生した。各社の銘柄（エビス、サッポロ、アサヒ）はそのまま引き継がれ、合併時の国内シェアは72%であったという（佐野宏明編 2021, p100）。明治41年(1908)3月発売のビールから、全銘柄の商標デザインが一新され、口金、コルク栓も改良された（サッポロビール株式会社 1996, p221）。本資料は、コルク栓で新デザインの肩ラベルと胴ラベルが残存している。また本資料は人工成形（廻吹法）であるが、大正初期になると、製瓶場を保有していた吹田工場と札幌工場、デッセル式製瓶機を改良した吹田式半自動製瓶機が導入され、それぞれ大正3年(1914)と大正8年(1919)に人工成形の製瓶が廃止されている（サッポロビール株式会社 1996, p237、梶木 2020、第1図）。コルク栓については、大正6年(1917)頃に全社的に王冠栓に切り替えられたようである（サッポロビール株式会社 1996, p240）。



絵葉書：大日本麦酒株式会社設立記念（汽車博覧会記念印）
【明治39年(1906)】（筆者蔵）

以上から、本資料の年代は、商標デザインが一新された明治41年(1908)以降、製瓶機械の導入により人工成形が廃止され始め、全社的に王冠栓に切り替えられる大正6年(1917)以前と考えられる。

第8図版12は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルは残存しない。コルク栓、なで肩、上げ底で、割型痕が胴部から口縁直上までであるが、底部の円状痕はないことから半自動式機械成形（半人工成形）。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。胴下部に陽刻「登録●商標（右読み）」「大日本麦酒株式會社醸造（右読み）」、底部に陽刻「F」とある。陽刻より大日本麦酒株式会社のビール瓶である。明治39年(1906)にビール有力3社が合併して誕生した同社は、ビールの大規模製造に伴う瓶の大量生産に備えて製瓶の機械化を積極的に進めた（サッポロビール株式会社 1996, p236-239、梶木 2020、第1図）。大正2年(1913)に吹田工場、デッセル式製瓶機を改良した吹田式（2年式）半自動製瓶機を稼働し、大正8年(1919)には札幌工場にも同製瓶機を導入している。日本で初めて全自動製瓶機を稼働させたのは大正6年(1917)に設立された日本硝子工業株式会社（大日本麦酒と麒麟麦酒が3分の1ずつ出資）で、神奈川県保土ヶ谷工場にオーエンス機（AQ型）を設置して操業を開始、大正7年(1918)には兵庫県尼崎にも新工場を建設した。しかし、同社は経営不振から大正9年(1920)に大日本麦酒へ吸収合併され、両工場は保土ヶ谷製壘工場、尼崎製壘工場となった。大正11年(1922)に吹田工場、昭和2年(1927)に札幌工場、オーエンス機AW型（グラハム式製瓶機）が導入されると、吹田式半自動製瓶機の使命は終わった。本資料は、梶木論文第3段階前半、半自動式機械成形（半人工成形）であり、コルク栓でもあることから、年代は吹田工場、吹田式半自動製瓶機が稼働する大正2年(1913)以降、全社的に王冠栓に切り替えられる大正6年(1917)以前と考えられる。

第8図版13は、市場流通品の国産ビール瓶（小瓶）で、ラベルは残存しない。王冠栓、いかり肩、上げ平底で、胴部に割型痕があるが、頸部に横方向の回転痕があることから人工成形（吹込法）。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。肩部に陽刻「TRADE○MARK<DNB マーク>」、胴下部に陽刻「DAINIPPON BREWERY Co, LTD」、底部に陽刻「T」とある。陽刻より大日本麦酒株式会社のビール瓶である。同社は明治43年(1910)に、小瓶を使用して「ミュンヘンビール」を発売している。社長の馬越恭一発案の商品で、濃色麦芽を用い、ミュンヘンビールに範をとり、それに近い香味の濃色ビールとしたものであった。この新商品には、当時開発中であった機械製の瓶と王冠を使用したとされている（サッポロビール株式会社 1996,p227-228）。発売当初は、目黒・札幌・吾妻橋工場から計13,000箱（1箱96本入り）を出荷し好評であったが、翌年からは販売量が大きく低下。大正11年(1922)には「今や忘却せられた感あり」と記録されるまでになっていた。本資料は、機械成形ではないが、小瓶、王冠栓であり、開発中で数が揃わなかった機械成形瓶の不足を補った人工成形瓶の可能性も考えられる。陽刻自体にシャープさはないものの、文字はのちの全自動式機械成形に共通するアルファベット表記である。梶木論文第2段階、人工成形（吹込法）であり、年代はミュンヘンビールの発売された明治43年(1910)以降、最後に札幌工場で人工成形の製瓶が廃止される大正8年(1919)以前と考えられる。

第9図版14は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルは残存しない。王冠栓、いかり肩、上げ平底で、胴部に割型痕があるが、頸部に横方向の回転痕があることから人工成形（吹込法）。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。胴下部に陽刻「TRADE<まる K マーク>MARK」「KABUTO BEER」とある。陽刻より、加富登麦酒株式会社の「カブトビール」のビール瓶と考えられる。明治21年(1888)に愛知県半田に設立された丸三麦酒醸造所は、明治22年(1889)に「丸三ビール」を発売。品質を上げるため桜田ビールの元技師を採用する一方、奇抜な宣伝活動を行ったという。明治29年(1896)に丸三麦酒株式会社へ移行する頃には、大手4社に次ぐ規模となっていた。新式のドイツ製設備一式を購入し赤煉瓦の新工場を建設してドイツ人技師を招き、明治32年(1899)に「カブトビール」を発売、新商標には兜をあしらった（サッポロビール株式会社 1996,p188-190、佐野宏明編 2021,p96）。しかし会社は赤字の連続で、経営を東武鉄道社長の根津嘉一郎に委ねることとなり、明治39年(1906)に日本第一麦酒株式会社へ改組改称。その後、明治41年(1908)に加富登麦酒株式会社と改称した。本資料は、梶木論文第2段階の人工成形（吹込法）、王冠栓であり、すでに国内で王冠栓の使用が開始されていることから加富登麦酒へ改称した当初の明治41年(1908)年以降、加富登麦酒が帝国鋳泉、日本製壘と合併して日本麦酒鋳泉株式会社が設立される大正10年(1921)以前と考えられる。

第9図版15は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルは残存しない。王冠栓、いかり肩、上げ平底で、胴部に割型痕があるが、頸部に横方向の回転痕があることから人工成形（吹込法）。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。肩部に陽刻「登録<桜マーク>商標（右読み）」、胴下部に陽刻「サクラビール（右読み）」「Sakura Beer（筆記体）」、底部に陽刻「<まる K マーク>」とある。肩部の桜マークが立体的であるのが特徴的である。陽刻より、帝国麦酒株式会社の「サクラビール」のビール瓶と考えられる。明治45年(1912)に福岡県大里町（現北九州市門司区）に設立された帝国麦酒株式会社は、九州で最初のビール会社である。神戸の鈴木商店（総合商社）が経営援助と工場用地の提供を行い、レンガ造りの工場が建設され、大正2年(1913)に「サクラビール」が発売された（サッポロビール株式会社 1996,p247-249、佐野宏明編 2021,p102）。売れ行きは好調であったが、金融恐慌で鈴木商店が破綻すると経営が苦しくなり、昭和4年(1929)に桜麦酒株式会社と改称した。本資料は、梶木論文第2段階の人工成形（吹込法）、王冠

栓であり、すでに国内で王冠栓の使用が開始されていることから「サクラビール」発売当初の大正2年(1913)年以降。陽刻のアルファベット表記が筆記体の「Sakura Beer」で、帝国麦酒時代の角型ラベルの表記と同じであることから、桜麦酒株式会社へ改称される昭和4年(1929)以前と考えられる。



チラシ：「サクラビール昭和三年度王冠懸賞の催し（帝国麦酒株式会社東京出張所）」【昭和3年(1928)】（筆者蔵）

第10図版16は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルは残存しない。王冠栓、いかり肩、上げ平底で、割型痕が胴部から口縁直上までであるが、底部の円状痕はないことから半自動式機械成形（半人工成形）。瓶色は褐色半透明で気泡が多く混じる。肩部に陽刻「TRADE○MARK<DNBマーク>」、胴下部に陽刻「DAINIPPON BREWERY Co, LTC」、底部に陽刻「<星形マーク>」とある。陽刻より、大日本麦酒株式会社のビール瓶である。後述する全自動式機械成形より陽刻の文字やマークが太く、「<DNBマーク>」が角ばっている。本資料は、梶木論文第3段階前半、半自動式機械成形（半人工成形）であるが、先述した第8図版12と違い王冠栓である。よって年代は、全社的にコルク栓から王冠栓に切り替えられた大正6年(1917)以降、札幌工場で全自動式のオーエンス機AW型（グラハム式製瓶機）が稼働して吹田式半自動式製瓶機が廃止された昭和2年(1927)以前と考えられる。



絵葉書：大日本麦酒株式会社札幌工場【昭和11年(1936)以前】（筆者蔵）

第10図版17は、盛岡市藪川の岩洞湖(ダム)周辺で採集された国産ビール瓶。王冠栓、いかり肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は褐色半透明。肩部に陽刻「TRADE●MARK<DNB マーク>」、胴下部に陽刻「DAINIPPON BREWERY Co. LTD」、底部に陽刻「13<星形マーク>7 Y」とある。陽刻より、大日本麦酒株式会社のビール瓶である。細谷地遺跡出土の第1・2図版1～3と同類資料であることから、梶木論文第3段階後半に相当し、製瓶年代は、広く見れば日本硝子工業(株)がオーエンス式自動製瓶機操業開始後の大正5年(1916)～昭和10年代であろうが、石川県能登島ガラス美術館2009、杉並区立郷土博物館2009の図録では同様の瓶が「昭和初期～10年代」とされている。



ポスター：「アサヒビール（日本麦酒株式会社、中国向け）」
【昭和初期】（筆者蔵）

第11図版18は、市場流通品の国産ビール瓶2本で、共にラベルが残存している。王冠栓、なで肩、上げ平底で、割型痕が胴部から口縁直上までであるが、底部の円状痕はないことから半自動式機械成形（半人工成形）。瓶色は明るい褐色半透明で気泡が多く混じる。肩部に陽刻「登録<KB マーク>商標（右読み）」「キリンビール（右読み）」、底部に陽刻「<まるBマーク> 43」とある。ラベルと陽刻より、麒麟麦酒株式会社「キリンビール」のビール瓶である。肩ラベルには、JBC より引き続き販売の代理店であった「明治屋」の名がある。年代は、大日本麦酒が吹田式半自動製瓶機の稼働を成功させた大正2年(1913)以降、明治屋が一手販売権を麒麟麦酒に返還した（生島2004,p134）大正15年(1926)以前と考えられる。

第11図版19は、盛岡市南仙北で採集された国産ビール瓶。王冠栓、なで肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は少し緑がかった褐色半透明。肩部と胴下部に陽刻「登録<KB マーク>商標（右読み）」「キリンビール（右読み）」、底部に陽刻「14」とある。陽刻より、麒麟麦酒株式会社のビール瓶である。細谷地遺跡出土の第2図版4と同類資料であることから、製瓶年代は、広く見れば大正5年(1916)～昭和10年代であろうが、杉並区立郷土博物館2009の図録では同様の瓶が「昭和10年代」とされている。

第12図版20は、盛岡市下太田方八丁ほかに所在する国指定史跡志波城跡の外郭西辺北部第107次調査表土採集の国産ビール瓶。王冠栓、いかり肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は緑色半透明。肩部に陽刻「登録<桜マーク>商標（右読み）」、胴下部に陽刻「SAKURA BEER」「サクラビール（右読み）」、底部に陽刻「TGC」とある。発掘調査報告書（盛岡市教育委員会2016）公表資料ではあるが、再度資料化を行い掲載する。陽刻より、帝国麦酒株式会社が改称した桜麦酒株式会社のビール瓶と考えられる。瓶色が一般的な褐色半透明ではないが、麒麟麦酒の海外輸出瓶が緑色であった（平成ボトル倶楽部監修2017,p40）ことからすると、本資料

縦78.0×横55.0cm、上下辺金具付き

も海外輸出瓶の可能性がある。

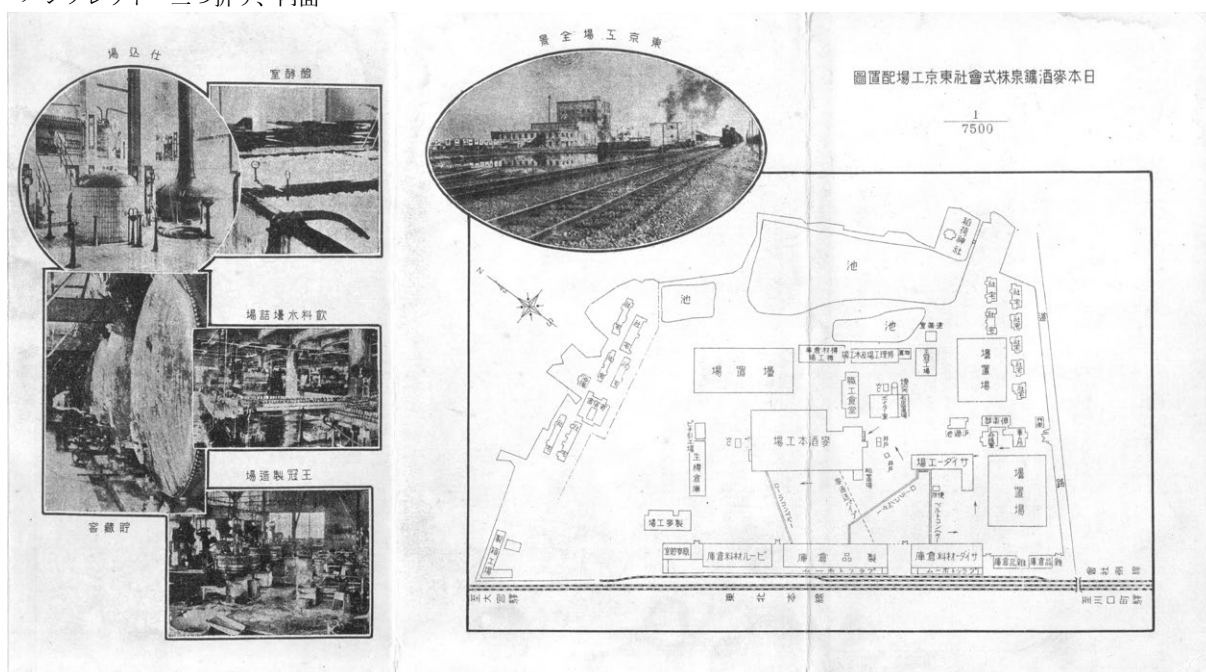
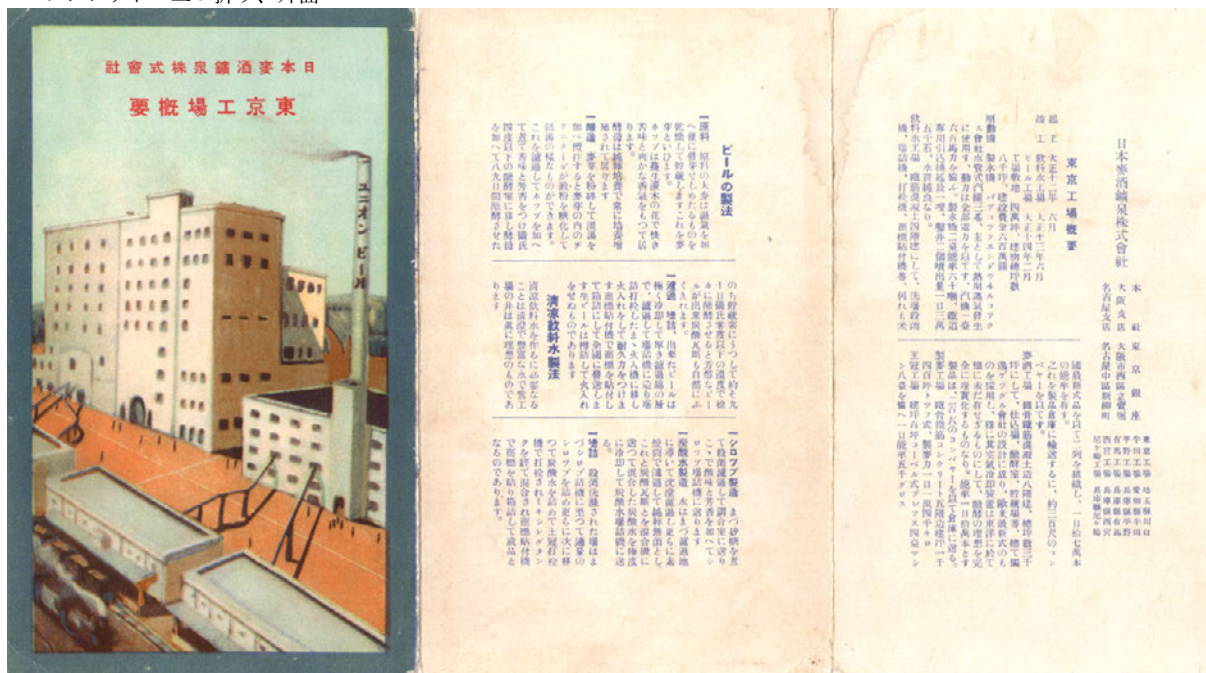
底部陽刻「TGC」について、発掘調査報告書では東洋硝子株式会社の略称と考えたが、この会社は機械製瓶事業に成功せず、大正14年(1925)に解散している。一方、大阪の徳永硝子製造所(昭和12年(1937)より徳永硝子株式会社、昭和16年(1941)に日本硝子株式会社に合併)は大正12年(1923)に半自動製瓶機を導入、その後自社で全自動に改造しており(山本1990,p242-245)、こちらの略称であると考えられ、訂正する。瓶色は異なるが細谷地遺跡出土の第3図版5と同類資料であり、製瓶年代は、帝国麦酒株式会社が桜麦酒株式会社に社名変更した昭和4年(1929)以降、徳永硝子株式会社が日本硝子株式会社と合併した昭和16年(1941)以前と考えられる。



ポスター：「サクラビール（桜麦酒(株)」【昭和12年(1937)、春田太治平画】（筆者蔵）

第12図版21は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルは残存しない。王冠栓、いかり肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は褐色半透明。肩部に陽刻「KBB(筆記体)」、胴下部に陽刻「BOTTLED & GUARANTEED BY KOTOBUKIYA BEER BREWERY」、底部に陽刻「I <まる B マーク> 5」とある。陽刻より、株式会社寿屋「新カスケードビール」のビール瓶と考えられる。大正8年(1919)に設立された日英醸造は、神奈川県鶴見にビール工場を建設、大正9年(1920)に「カスケードビール」を売り出した。禁酒法施行によってアメリカで不要になったビール醸造設備を輸入したものであったが、販売不振と関東大震災の影響で経営が破綻。昭和3年(1928)に寿屋(現サントリー)がこれを買取った。寿屋は、鳥井信次郎が創業し、赤玉ポートワインの成功をもとに、京都府山崎に日本初のウィスキー蒸留所を建設する一方、次々と新規事業に挑戦していた。昭和4年(1929)に発売した「新カスケードビール」は、大瓶の小売価格を1本29銭とし、他のビール会社が協定を結んで1本38銭としていたのに対抗した。昭和5年(1930)からは新ブランド「オラガビール」を発売、翌年に1本25銭まで価格を下げたが、業界を巻き込んだ廉売合戦に陥り、昭和9年(1934)1月に寿屋はビール事業から撤退した(サッポロビール株式会社1999,p266、佐野宏明編2021,p105)。製瓶年代は、寿屋がビール事業を行っていた昭和4～8年(1929-33)であろうが、オラガビール販売の際に、コストダウンのため麒麟麦酒の回収瓶を使用したことが裁判沙汰となった(端田2016,p105-111)ことを考慮すると、新瓶製造は新カスケードビール販売当初だけだったかもしれない。

第13図版22は、盛岡市薮川の岩洞湖(ダム)周辺で採集された国産ビール瓶。王冠栓、いかり肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は褐色半透明。胴下部に陽刻「NIPPON BEER KOSEN CO. LTD」、底部に陽刻「I」とある。陽刻より、日本麦酒鉾泉株式会社「ユニオンビール」のビール瓶と考えられる。愛知県半田の加富登麦酒株式会社は、大正10年(1921)に三ツ矢サイダーの製造会社である帝国鉾泉株式会社、その姉妹会社である日本製壘株式会社と合併して日本麦酒鉾泉株式会社となり、大正11年(1922)4月に「ユニオンビール」を発売。



看板拡大

新工場として大正 14 年(1925)に埼玉県川口へ東京工場、昭和 2 年(1927)に兵庫県西宮へ大阪工場を完成させ、急成長した（サッポロビール株式会社 1999,p246-247）。細谷地遺跡出土の第 3 図版 6 と同類資料であり、製瓶年代は、広く見れば会社が存続した大正 11～昭和 7 年(1922～32)であろうが、後述する第 13 図版 23 が同社後半期のビール瓶と考えられることから、初期～前半期（大正 11～14 年頃）の瓶と推測される。

第 13 図版 23 は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルと王冠が残存する。王冠栓、いかり肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は褐色半透明。肩部に陽刻「<NBK マーク>」、胴下部に陽刻「<二重まる本マーク> NIPPON BEER KOSEN CO LTD」、底部に陽刻「4 <NBK マーク> 1」とある。ラベルは昭和 17 年(1942)に 1 年間だけ使用された大日本麦酒株式会社「エビスビール」であるが、瓶は陽刻から昭和 8 年(1933)7 月に大日本麦酒株式会社と合併した日本麦酒釀泉株式会社のビール瓶である。津嶋 2023,p10 で指摘しているとおり、肩部陽刻「<NBK マーク>」は合併後の大日本麦酒のサイダー瓶に継承されていることから、当該ビール瓶は合併直前まで製造されていた、日本麦酒釀泉の後半期（大正 15～昭和 7 年）のビール瓶と考えられる。日中戦争が始まった昭和 12 年(1937)以降、日本経済は急速に戦時色を濃くしていったが、ビールの総製造量は昭和 14 年(1939)に最高を記録していた。しかし、戦時体制へ移行する中で物資不足が深刻化し、あらゆる物価と同様にビール価格も統制され、家庭用ビールは配給が昭和 15 年(1940)6 月より京浜地区で始まっている（サッポロビール株式会社 1999,p297-301）。このような時局の中で、ラベルは当該資料のように簡略化され、瓶は合併前のものでも再利用されていたようである（ビール瓶不足のため、空き瓶と引き換えでないとビールが買えないというリンク制が各社ごとに行われていた）。

第 14 図版 24 は、市場流通品の国産ビール瓶で、ラベルと王冠が残存する。王冠栓、なで肩、平底で、割型痕が胴部から口縁直上まであり、底部の円状痕もあることから全自動式機械成形。瓶色は淡青色透明。肩部と胴下部に陽刻「登録<KB マーク>商標（右読み）」「キリンビール（右読み）」、底部に陽刻「A 4」とある。ラベルは銘柄別ラベル廃止後の統一ラベル（麒麟麦酒株式会社製造）、陽刻から瓶は麒麟麦酒のビール瓶である。昭和 16 年(1941)12 月に太平洋戦争が始まると、ビールの全国的な配給システムを整備・統制する必要性が生じ、昭和 17 年(1942)に大蔵省の勧告により配給機関としてビール製造各社の出資による中央麦酒販売株式会社が設立され、下部組織に 7 地域の地方麦酒販売株式会社を置くことで、一元的配給システムが確立された。昭和 18 年(1943)5 月には銘柄別ラベルが廃止、麦の穂のデザインと「麥酒」の文字、用途名（家庭用、業務用、価格特配）、会社名が小さく表示されただけの単色刷り（緑色、赤色、青色）の統一ラベルが用いられるようになった。昭和 19 年(1944)に入ると用途名の表示もない「麥酒」文字だけのラベルとなり、ビール瓶も共用することとなり、徴税の観点から大瓶 3.51 合（633.168ml）が基準容量とされた（サッポロビール株式会社 1999,p302-304）。当該資料のラベルは、昭和 18 年の家庭用の統一ラベルの「家庭用」部分が切り取られており、昭和 19 年の統一ラベルに転用されたものと考えられる。王冠も、清涼飲料のものが転用されている。戦時下昭和 10 年代のビール瓶の瓶色がまちまちであることについて、資材不足でガラス屑でつくられたためとされているが（杉並区立郷土館 2009,p10）、当該資料は清酒瓶など同様の淡青色透明瓶となっている。

5. まとめ

以上、明治前半期の舶来ビールに始まり、大正、昭和前期戦時下までの近代ビール瓶について、年代根拠を明らかにしながら 24 件の資料紹介を行った。うち 7 件はラベルが残存する市場流通資料であり、今後、事例の公表が進むことを期待したい。また、底部陽刻に見られるマーク、アルファベット、数字の意味するところ（製瓶会社、工場、管理番号等）について、情報があればご教示をお願いしたい。なお、本文内に筆者が所蔵する広告物（引札、絵葉書、ポスター、チラシ等）の画像を掲載しており、関連資料として参照していただければ幸いである。

〔引用参考文献〕

- 生島淳 2004「明治・大正期における麒麟麦酒と明治屋の関係について－磯野計と磯野長蔵の起業家活動を中心に－」『イノベーション・マネジメント』No.1（法政大学イノベーション・マネジメント研究センター）
- 石川県能登島ガラス美術館 2009『企画展「ガラスびん展－時代をうつすガラスたち－」展示図録』
- 梶木理史 2020「近代ガラス製造業における製瓶技術の発展過程 考古学資料の検討から」『GLASS 日本ガラス工芸学会誌』64
- 花林舎編 2012『田村コレクション 引札』紫紅社文庫
- 川島智生 2013『アサヒビール所蔵資料でたどる近代日本のビール醸造史と産業遺産』淡交社
- 麒麟麦酒株式会社 1957『麒麟麦酒株式会社五十年史』
- 麒麟麦酒株式会社編 1984『ビールと日本人 明治・大正・昭和ビール普及史』三省堂
- キリンビール株式会社 2017『図説ビール』河出書房新社
- サカツコーポレーション編 2006『明治・大正・昭和 お酒の広告グラフィティ サカツ・コレクションの世界』国書刊行会
- 桜井準也 2019『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房（2006 初版）
- サッポロビール株式会社 1996『サッポロビール 120 年史』
- サッポロビール博物館 1998『ビールのラベル』クレオ
- 佐野宏明編 2010『浪漫図案 明治・大正・昭和の商業デザイン』光村推古書院
- 佐野宏明編 2021『開花図案 文明開化に始まる商業デザイン』光村推古書院
- 杉並区立郷土博物館分館 2009『企画展「硝子壺の残像－ガラスびんに映った杉並の風景－」展示図録』
- 津嶋知弘 2023「盛岡城遠曲輪跡第 22・23 次調査出土の近現代ガラス瓶」盛岡市遺跡の学び館学芸レポート vol.5（web 盛岡市役所ホームページ）
- 端田晶 2016『おはっとうまい～日本のビール面白ヒストリー 大日本麦酒の誕生』雷鳥社
- 平成ボトルクラブ監修 2017『日本のレトロびん』グラフィック社
- 山本孝造 1990『びんの話』日本能率協会

〔発掘調査報告書〕

- 盛岡市教育委員会 2016『志波城跡 平成 23・24・25 年度発掘調査報告書』
- 盛岡市・盛岡市教育委員会 2020『盛南地区遺跡群発掘調査報告書 XII 道明地区土地区画整理事業関連遺跡 平成 29 年度発掘調査 細谷地遺跡』
- 盛岡市・盛岡市教育委員会 2021a『盛南地区遺跡群発掘調査報告書 XIII 道明地区土地区画整理事業関連遺跡 平成 30・令和元年度発掘調査 細谷地遺跡』
- 盛岡市・盛岡市教育委員会 2021b『盛南地区遺跡群発掘調査報告書 XIV 道明地区土地区画整理事業関連遺跡 平成 30・令和元年度発掘調査 細谷地遺跡』

全高29.0×口径2.6×肩幅7.9×底径6.7cm



S=1:3

王冠栓

全自動式機械成形



1. 大日本麦酒(株)-37次RD902【昭和初期～10年代】

全高28.5×口径2.6×肩幅7.9×底径6.7cm



S=1:3

王冠栓

全自動式機械成形



2. 大日本麦酒(株)-40次RD919【昭和初期～10年代】

全高(24.7)×口径(欠損)×肩幅7.8×底径6.8cm



全自動式機械成形



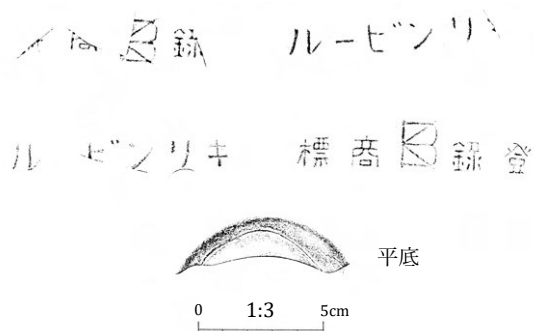
S=1:3

3. 大日本麦酒(株)-41次RD935【昭和初期～10年代】

全高(24.7)×口径(欠損)×肩幅(欠損)×底径(欠損)



全自動式機械成形

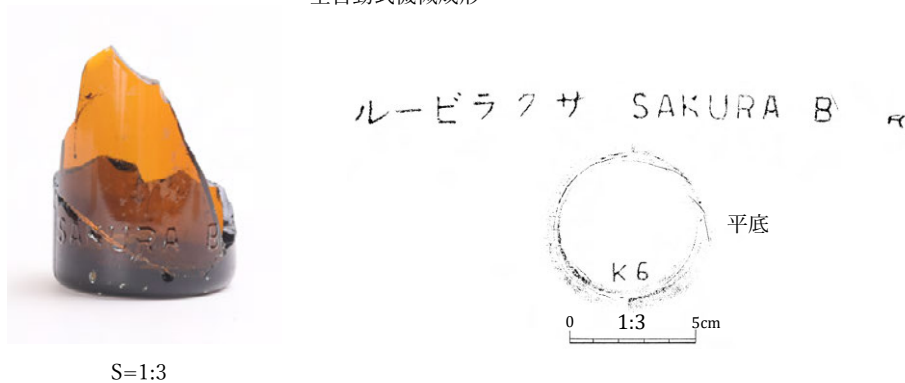


S=1:3

4. 麒麟麦酒(株)-41次RD935【昭和10年代】

全高(10.1)×口径(欠損)×肩幅(欠損)×底径6.7cm

全自動式機械成形



S=1:3

5. 「サクラビール（桜麦酒(株)）」-41次RD935【昭和4～18年(1929-43)】

全高(4.2cm)×口径(欠損)×肩幅(欠損)×底径(欠損)

全自動式機械成形



S=1:3

6. 「ユニオンビール（日本麦酒鉱泉(株)）」-41次RD935【大正11～昭和8年(1922-33)】

全高(26.5)×口径(欠損)×肩幅7.9×底径6.6cm

全体に水平方向回転痕、人工成形



S=1:3

7. ビール瓶-41次RD935【明治30年代～大正初期】

全高29.5×口径(3.0)×胴径8.0×底径6.9cm
全体に水平方向回転痕、人工成形(廻吹法)

コルク栓、口金



S=1:2



陽刻「M.RASPE&Co」

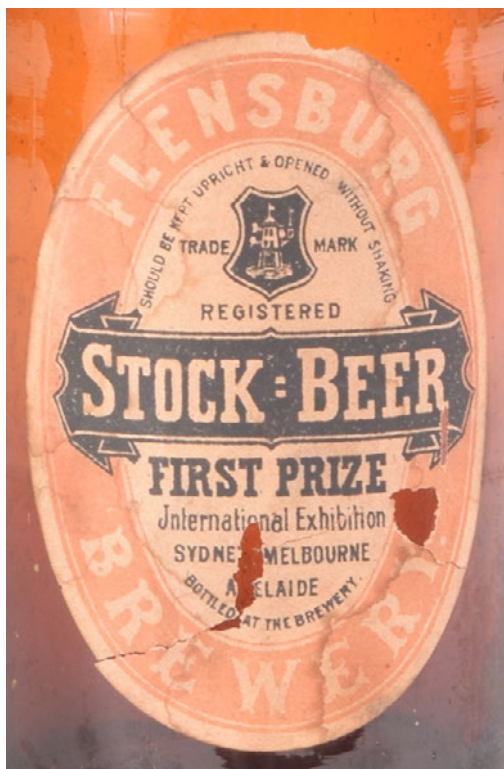
陽刻「ストックビール (右読み)」



【参考】ストックビールのラベル
〔佐藤宏明編2021より引用〕



上げ底



8. 「ストックビール (フレンスブルク醸造所(ドイツ))」(舶来ビール、代理店：M.ラスペ商会)【明治10～20年代頃】(筆者蔵)

全高29.1×口径2.8×胴径7.9～8.0×底径6.9cm

全体に水平方向回転痕、人工成形（廻吹法）

コルク栓



S=1:2



上げ底



【参考】明治29年(1896)新聞広告



【参考】麒麟ビールのラベル(1889-1906)
〔麒麟ビール株式会社2017より引用〕

9. 「麒麟ビール（ジャパンプルワリー・カンパニー）」【明治28～39年(1895-1906)】（筆者蔵）

第5図版 採集・市場流通近代ビール瓶(2)

全高(29.6)×口径(2.8)×胴径7.8×底径7.0cm

全体に水平方向回転痕、人工成形（廻吹法）

王冠栓



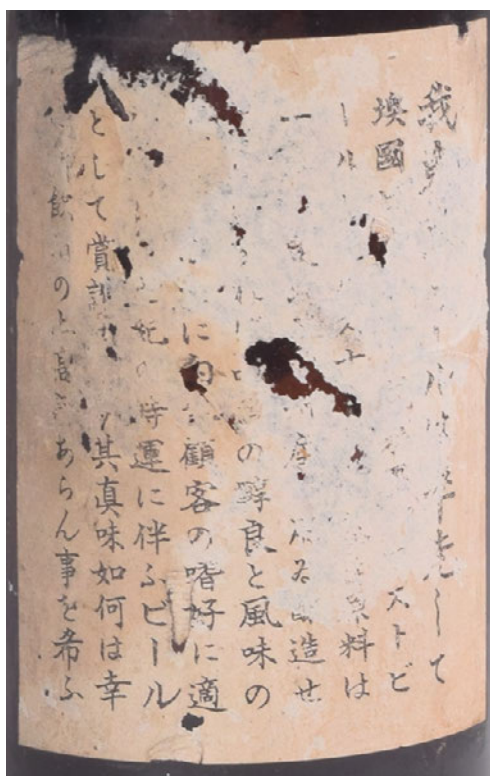
S=1:2



【参考】大日本麦酒に吸収合併直後のラベル
〔『サッポロビール120年史』より〕



上げ底



裏面ラベル

我東京ビールは率先して
 壘国ビ□□□□□フストビ
 ール□□ルスナ□□□き原料は
 一□□□□□御座□□み醸造せ
 □□□れば中□の醇良と風味の
 □□□□□に内外顧客の嗜好に適
 □□□□□紀の時運に伴うビール
 として賞賛せ□□其真味如何は幸
 □御飲用の上高評あらん事を希ふ

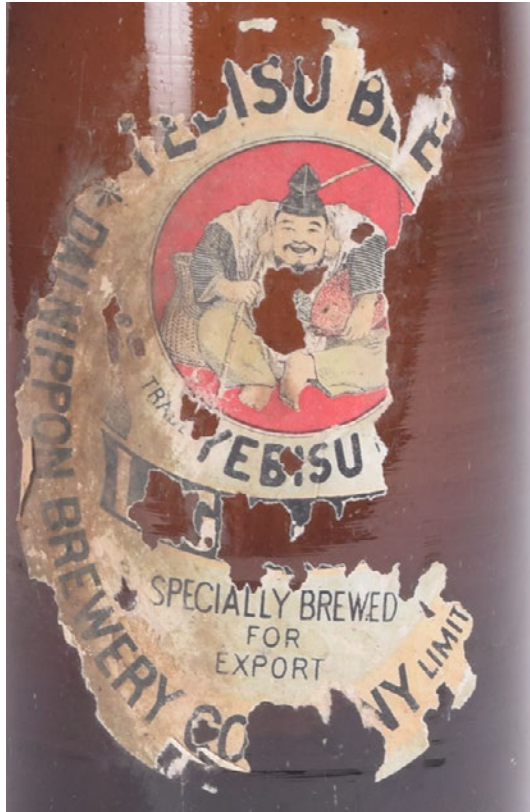
10. 「東京ビール（東京麦酒新(株)」【明治39年(1907)】（筆者蔵）

第6図版 採集・市場流通近代ビール瓶(3)

全高29.1×口径2.8×胴径7.9～8.0×底径6.8cm

全体に水平方向回転痕、人工成形（廻吹法）

コルク栓



【参考】エビスビールのラベル(1908-36)
〔サッポロビール博物館1998より引用〕

S=1:2



上げ底、陽刻「<YGマーク>」

【参考】明治41年3月に一新された
大日本麦酒各ラベルと口金
〔『サッポロビール120年史』より引用〕



11. 「エビスビール（大日本麦酒(株)）」【明治41～大正6年(1908-17)】（筆者蔵）

第7図版 採集・市場流通近代ビール瓶(4)

全高28.7×口径2.6×胴径7.7～7.8×底径6.9cm



コルク栓

半自動式機械成形
(半人工成形)



上げ底、陽刻「F」

標商 ○ 録登 造醸社會式株酒麥本日大
0 1:3 5cm

S=1:3

12. 大日本麦酒(株)【大正2～6年(1913-17)】(筆者蔵)

全高23.7×口径2.6×胴径6.3～6.5×底径5.9cm



王冠栓

人工成形(吹込法)



頸部に横方向回転痕

TRADE MARK
DAINIPPON BREWERY CO., LTD

S=1:3



【参考】ミュンヘンビールのラベル(1910以降)〔サッポロビール博物館1998より引用〕



上げ平底

0 1:3 5cm

13. 「ミュンヘンビール(大日本麦酒(株))」【明治43～大正8年(1910-19)頃】(筆者蔵)

全高28.7×口径2.6×胴径7.8～8.2×底径7.1cm



王冠栓

人工成形（吹込法）



【参考】カブトビールのラベル
〔佐藤宏明編2021より引用〕



頸部に横方向回転痕



上げ平底、陽刻なし

TRADE (K) MARK

KABUTO BEER

0 1:3 5cm

S=1:3

14. 「カブトビール（加富登麦酒(株)）」【明治41～大正10年(1908-21)】（筆者蔵）

全高29.5×口径2.6×胴径7.6～7.7×底径7.2cm



王冠栓

人工成形（吹込法）



【参考】サクラビールのラベル
〔佐藤宏明編2021より引用〕



頸部に横方向回転痕



上げ底、陽刻「<まるKマーク>」

標商 録登

ルービラクサ

Sakura Beer

0 1:3 5cm

S=1:3

15. 「サクラビール（帝国麦酒(株)）」【大正2～昭和4年(1913-29)】（筆者蔵）

全高28.2×口径2.6×胴径7.9～8.0×底径7.2cm



S=1:3

王冠栓

半自動式機械成形
(半人工成形)

TRADE MARK

DAI NIPPON BREWERY CO. LTD



上げ平底

0 1:3 5cm

16. 大日本麦酒(株)【大正6年(1917)～昭和2年(1927)】(筆者蔵)

全高28.8×口径2.6×胴径7.6～7.9×底径6.7cm



S=1:3

王冠栓

全自動式機械成形

【参考】サッポロビールのラベル
(1936-42)〔川島2013より引用〕



TRADE MARK

DAI NIPPON BREWERY CO. LTD



平底、円状痕

0 1:3 5cm

17. 大日本麦酒(株)【昭和初期～10年代】(盛岡市薮川採集)

全高29.0×口径2.6×胴径7.6～7.7×底径7.1cm



18-1

S=1:3

18-2

王冠栓

半自動式機械成形
(半人工成形)



18-1



18-2

標商 録登 ルービンリキ



上げ平底

0 1:3 5cm

18. 「麒麟ビール (麒麟麦酒(株))」【大正2～15年(1913-26)】(筆者蔵)

全高28.8×口径2.6×胴径7.8×底径7.1cm



S=1:3



王冠栓

全自動式機械成形

ルービンリキ 標商 録登

標商 録登 ルービンリキ



平底、円状痕

0 1:3 5cm

19. 麒麟麦酒(株)【昭和10年代】(盛岡市南仙北採集)

全高28.6×口径2.6×胴径7.7～7.8×底径6.6cm



S=1:3

王冠栓

全自動式機械成形

【参考】サクラビールのラベル
〔佐藤宏明編2021より引用〕

標商  録登

SAKURA BEER ルーピラクサ



平底、円状痕

0 1:3 5cm



20. 「サクラビール（桜麦酒(株)）」【昭和4～16年(1929-41)】（盛岡市史跡志波城跡第107次調査表土採集）

全高28.8×口径2.6×胴径7.8×底径7.0cm



S=1:3

王冠栓

全自動式機械成形

【参考】新カスケードビールのラベル
〔佐藤宏明編2021より引用〕

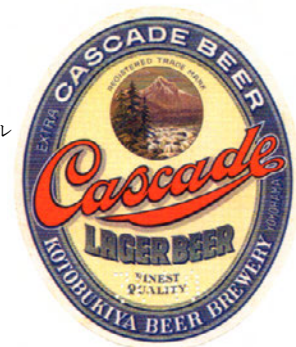
1929 1933 1936

BOTTLED & GUARANTEED BY KOTOBUKIYA BEER BREWERY



平底、円状痕

0 1:3 5cm



21. 「新カスケードビール（(株)寿屋）」【昭和4～8年(1929-33)】（筆者蔵）

第12図版 採集・市場流通近代ビール瓶(9)

全高29.0×口径2.6×胴径7.6～7.8×底径6.7cm



S=1:3

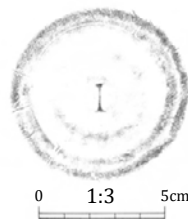
王冠栓

全自動式機械成形



【参考】ユニオンビールのラベル
〔佐藤宏明編2021より引用〕

NIPPON BEER KOSEN CO. LTD



平底、円状痕

【参考】エビスビールのラベル(1942)
〔サッポロビール博物館1998より引用〕



22. 「ユニオンビール（日本麦酒鉱泉(株)」【大正11～昭和7年(1922-32)】（盛岡市薮川採集）

全高29.0×口径2.6×胴径7.5～7.7×底径6.6cm



S=1:3



王冠栓

全自動式機械成形

87k



⊕ NIPPON BEER KOSEN CO LTD



平底、円状痕

0 1:3 5cm

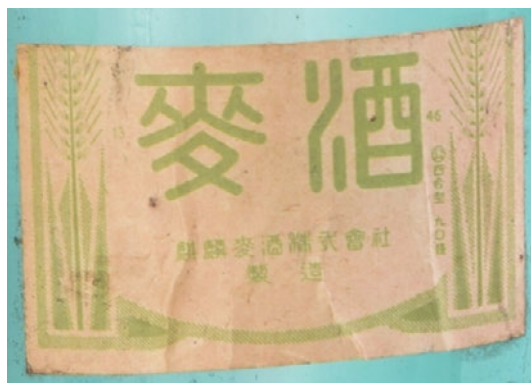
23. ラベル：「エビスビール（大日本麦酒(株)」【昭和17年(1942)】、瓶：日本麦酒鉱泉(株)【昭和7年(1932)以前】（筆者蔵）

第13図版 採集・市場流通近代ビール瓶(10)

全高(29.2)×口径(2.8)×胴径7.4×底径6.7cm
全自動式機械成形、王冠栓



S=1:3



46
④
四合型
九〇銭

ルービンリキ

標商 録登



平底、円状痕

0 1:3 5cm



「キリン（右読み）」

「清涼飲料（右読み）」

王冠



昭和18年(1943)



昭和19年(1944)

【参考】銘柄廃止後の統一ラベル
〔『麒麟麦酒株式会社五十年史』
より引用〕

24. 「麦酒（麒麟麦酒(株)）」【昭和19年(1944)】（筆者蔵）

第14図版 採集・市場流通近代ビール瓶(11)